

令和4年7月16日(土)

信濃教育会 研究発表会 中信(木曾町立日義小学校)

佐伯胖所長 開会の挨拶

おはようございます。本日は第74期研修員の第3回目の研究発表会であります。コロナ禍の中で会場を引き受けてくださいました日義小学校には、心から感謝する次第であります。

開催にあたりまして、研究所での活動について少しお話したいと思えます。研究所で研究する先生方のことを以前は研修員というふうに言っておりましたけれども、本年度からは研究員と呼ぶようになりました。研修ではなくて研究だということは、なかなか意味があると思えます。つまり研修という言葉には、まだ未熟というか修行が足りないということで、修行して一人前になるというような意味がありますけれども、既にかなり進んで、一人前になられた方が更なる研究を進める、というのが研究ですね。そういう点で、研究員ということになったことは、大変好ましいことだと思います。

しかしここで研究とは何かということについて、改めて考えてみたいと思うんですね。研究に関しては、ジョン・デューイという人の「思考の方法(原題「How We Think」, 1910年)」という本がありまして、これは研究するということについての非常に有名な本であります。その中では、省察(reflection)、それから批判的思考(critical thinking)、そういったことについて非常に詳細に論じられているのですが、その最終章に驚くべき言葉があったんですね。それは「遊び心とまじめ心は同時に併存するし、むしろそれこそが理想の心的状態である」という、そういう文章です。英語で言えば、「To be playful and serious at the same time is possible, and it defines the ideal mental condition」遊びとまじめというのは、正反対のように普通は捉えますよね。「遊んでばっかりいないで、まじめにやれ」なんていうのは、これは「遊ぶのではなくて、まじめにやれ」というような意味であります。両者は対立するかのよう捉えられるのが普通ではないかと思うんですね。しかしデューイは、その二つは両立するというだけじゃなくて、むしろそれが両方同時に存在していることの方が理想的だと言っているんですよ。このことを書かれているのはその本の最終章ですけども、その本自身は1910年が初版で33年に改訂版が出ています。改訂版では随分色々な章が新たに書き加えられたりして変わっていくのですが、その最終章は全然変わっていないんですね。ですからその今の表現は、デューイ自身の、作家の、10年から33年に変わってもこの「playfulness」と「seriousness」ということ自身が両立するということについては、そのまま語っているわけですね。デューイに関する研究書は随分ありますけれども、私はこのことについて詳しく論じているデューイ研究の論文や著書を見たことがないですね。あまりこれは注目されていないと思えます。私自身は非常に驚きました。

普通は全く反対だと思うことを、両立するし、しかもその両立することが理想なんだと言って、ある意味で不思議に思うんですね。少し思い返してみると、私がアメリカに留学した時に大学院で、何かを発言したりすると、教授や同僚が「That's very provocative」という言い方をしてくるんですね。「provocative」という言葉を辞書で調べますと、「挑戦的である」とか「挑発的である」とかよく分からない訳語もありますけれども、私の経験から言えば、「That's provocative」というのは、普通我々で言う「面白いね」というような意味なんですね。「それ非常に面白いね」という。しかし私は、そういう言葉を日本の大学で教授から言われたことはほとんど覚えていません。そういうことはなかったですね。ま

た、学校の先生が、子どもの発言に対して「それって面白いね」という発言をするのを、私はあまり聞いたことがないですよ。しかしアメリカでは、非常によく言うんですよ。そしてそれで授業が脱線したり、あるいはどんどん面白い話が展開したり、じゃあこういうことはどうかな、あのことはどういうことなのかな、と色々な議論がそこで出てくるんですね。それが「provocative」ということなんです。これは非常に大事なことで、「playfulness」ということについてデュエイが言っているのは、まじめに探求している時に、急にふと思いつくものである。思いつくというのは、「あっ、なんか気になるな」「なんかそれって面白いな」というのが、湧いてくるというわけですね。それは意図的にそういう思いを引き起こすことではなくて、自然にそれが湧き起こってくることなんだということ。それで湧き起こってきた時にそれを逃さずに、そういう時は当初の予定や計画をやめて、そっちの方にむしろ色々なことを空想すること、色々な可能性を探求してみるということを、随時その時に、徹底的にやってみるということが大事。そうやってみて、ふと元の課題に帰った時に、どうも課題自身が間違ってたかもしれないな、別のことを考えた方が良くもかもしれないな、というふうに思い直すことが、探求することなんだ。探求というのは、計画通りということではなくて、そういった「playfulness」、ちょっと遊び心で色々なことを考えてみた時に、「あれ、ちょっと違ったことの方がむしろ大事かもしれないな」というふうに思うわけですね。それが、むしろ非常に好奇心ということを大事にした研究が、本来の在り方なのだ、ということ、デュエイは言っていたわけです。

私は、やはり子ども達の発言の中で、先生方も、当初の計画と全然違うようなことになってきたりする時に、「あっそれはまた別の時に」と言うのではなくて、「あれ、そんなこともまた良いかもしれないな」というふうにして、子ども達の面白さ、子ども達が面白いことを思い付くこと自身も、「あ、それいいね」という、「That's provocative」というような感覚でそれを受け止める。また先生自身も物事を探求している時に、何かふと「いいこと思いついた」というようなことが起こった時に、時には脱線するというのも大事なのではないかと思うんですね。私がアメリカから帰って来た後ですが、大学院で指導している時に、学生が、時々ふと面白いことを言い出すことがあるんですよ。そんな時私はもう、あらゆる予定を全部やめて、「あ、それってすごくいいね、おもしろいね、ちょっとどうかな」というふうなことで、大いにそれを励まして、それで修士論文が全く新しく始まったりするという、そういうことを経験しています。しかしそれは、日本では従来はあまり無かったですね。そういった点で、今日の発表の中で「あ、それって面白いな」ということを見つけたら、ぜひ皆さん発言していただければと思いますし、そういったことで、また授業の中で先生がその子ども達の発言の中から面白さを見つけて、それで予定を変えて、それにむしろハマるといえるか、そういうような実践もあると思います。そういった所を、ぜひその「provocative」「面白い」「それってちょっと予定していなかった、想定してなかったけれど面白いよ」という感覚を、ぜひ今日味わっていただければと思います。よろしくお願いします。